

幼児の食行動に関する調査研究（第3報）

○峯木真知子*¹、戸塚清子*²、井戸明美*¹(*¹青葉学園短大、*²相模女大高等部)

「目的」 幼児の咀嚼、嚥下状況など食行動について、1990年¹⁾、2000年²⁾にアンケート調査を行った。更に追加調査を行い、食行動上の問題点を検討した。

「方法」東京都及び神奈川県にある幼稚園、保育所に通う幼児1213名（幼稚園1005名、保育所208名）を対象に留置き法によるアンケート調査を行った。調査期日は2000年3月から11月。調査内容は、幼児の体格、体型、咀嚼状況、嚥下状況、食欲の有無、歯の状況、食事の心配事、食事に関する問題の有無とその相談者など

「結果」幼児の咀嚼状況には、性別、第何子、体型、嚥下状況、食欲の有無、食事量の多少、ダラダラ食べる、食べこぼしが多い、好き嫌が多いの項目などが関連していた。幼児の年齢が高くなると、体型のよい、指しゃぶりはしなくなる、食事量が良好な幼児は増え、咀嚼、嚥下状況には影響しなかった。あまり噛めない幼児は全体の6.9%、噛まずにすぐ飲み込む幼児は9.7%、飲み込み上手でない4.7%であった。咀嚼および嚥下に問題のある幼児をもつ母親の45-60%は食事上の相談をしていた。食事に関する相談は3歳では約60%、6歳では45%で年齢と共に少なくなり、相談者は保育所では保育士が多く、3歳で35.1%、6歳12.8%。幼稚園児では祖母、友人が多いが、幼稚園教諭も7%で、10年前に比較するとかなり多く、幼稚園教諭にも正しい食教育と知識が必要とされている。

1) 平山と峯木：聖セシリア女短大紀要、1993 2) 井戸と峯木：青葉学園短大紀要第25号、2000